The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | <Book Review> Eileen Boris and Rhacel Salazar Parreñas eds., Intimate Labors : Cultures, Technologies, and the Politics of Care, Stanford University Press, 2010. |
| Author(s) | 篠田, 恵 |
| Citation | 年報人間科学. 2013, 34, p. 157-161 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/24979 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

**Eileen Boris and Rhacel Salazar Parreñas eds.**
***Intimate Labors: Cultures, Technologies, and the Politics of Care***
Stanford University Press, 2010.

篠田　恵

本書は、公的 / 私的領域の双方における有償 / 無償の様々な活動を、「親密性の労働」という概念を用いて分析した論集である。編者の Boris は長年にわたって女性と労働、特に家事労働に関する研究を行なってきた。Parreñas は主にフィリピン人女性の移住労働に関する研究成果を数多く出版し、日本の移民研究でも頻繁に参照されている論者の一人である。

まずは、本書のタイトルにもなっている「親密性の労働」概念を紹介する。「親密性の労働 intimate labor」[1)] 概念は、2007 年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校で開催されたカンファレンスのタイトルに由来する。本書の執筆陣は、このカンファレンスに出席した研究者らで構成されている。「親密性の労働」は、「他人、友人、家族、セックスパートナー、子ども、そして高齢者や病人、また障害を持つ人の身体的、知的、情緒的そしてその他の感情的ニーズを増進する」(p2)。ここで「労働」とは賃金労働のみならず、有償 / 無償の様々な活動を指す。この定義を満たす活動は多岐にわたり、家事など私的空間で行われるものも、病院での看護や路上で客引きをするセックスワーク（街娼）など、公的空間で行われるものも含む。ホテルの清掃員など、担い手と受け手が必ずしも対面しない労働も、人の世話をすることと人の過ごす空間を整える仕事の境界は曖昧であることから、親密性の労働に含まれうる (p3)。相手への接触、身体的情緒的接近、個人情報の熟知などをともなうことが、親密性の労働の条件となる。これら多種多様な仕事の共通点は、親密性の労働の提供者と受け手の「相互依存関係を築き、女性が不払いで果たすべきと見なされていた仕事であること、そして市場的価値が低く、下層階級や人種的なよそ者が担うべきとされていること」(p2) である。本書の執筆陣が女性学、エスニック・スタディーズ、歴史学など様々な分野から集められていることは、親密性の労働のこの性質を領域横断的に理解するために必要だったと思われる。

次に、本書の構成と概要を紹介する。本書は三部構成で、最後に結論部がつけられている。第一部「親密性の再構成―テクノロジーとグローバリゼーション」では、テクノロジーの発達と物理的距離の遠さがどのように親密な関係を再定義するのかが検討される。テクノロジーの発達によって出現した新たな親密性の労働として、先進国の消費者対応用コールセンターや代理母、卵子・精子提供、国境を越えた養子縁組、FtM トランスジェンダーのパートナー女性が女性性のより強い表出を求められることが各章で取り上げられ、国家間、人種間、ジェンダー間の不平等がこれらの仕事を作り出し、また維持・再生産することが明

らかになる。

例えば、インドに設置されているアメリカ製品の消費者コールセンターでは、英語話者である中産階級の若者たちが労働疎外を抱えながら働いていると Kalindi Vora の論文「ケアの伝達―感情の経済学とインドのコールセンター」では述べられる。アメリカの消費者に対応するため、インドの労働者たちはアメリカ中産階級の文化を学び、英語のアクセントをアメリカ風にすることで、徐々に電話の先のアメリカ文化に親近感を覚えるようになる。一方でインドとアメリカの間の時差のため、労働者は自分の住む土地で社交ができない。またコールセンター業務で得る知識・技術はインドでの他の仕事に応用できないため、コールセンター業務に縛り付けられるという事態が起きるのである。この事例が明らかにするのは、インドとアメリカの経済格差と情報通信技術の発展により新たに現れた、24 時間対応のコールセンターという物理的距離を前提にした仕事が、インドの労働者の日常生活からの疎外という国家間の不平等を再生産しているということである。

アメリカで卵子・精子提供を行うクリニックを調査した論文「遺伝子を売る、ジェンダーを売る―卵子の取次機関・精子バンク、遺伝子物質の医療市場」で Rene Almeling は、高度生殖医療が施される過程に、アメリカ中産階級の女性性 / 男性性の観念が影響を与えていることを明らかにした。主に中産階級で高等教育を受けた女性からなる卵子提供者は、応募者の選抜から依頼者とのマッチングまで一連のプロセスにおいて、自己犠牲的な女性像を求められる。依頼者が閲覧するプロフィールには子どもに対する愛情深さなど女性的な情報を掲載し、また卵子提供の動機は決して経済的な事柄ではなく、依頼者に贈り物をするような気持ちを持っていることが求められる。卵子提供後クリニックは、提供者に後にも残るようなアクセサリーなどをお礼として贈るよう依頼者に勧めると言う。ここでは、高度生殖医療の技術発展がアメリカ中産階級の社会・文化的なジェンダー規範を前提とし、また維持していることが分かる。

第二部「親密関係の創出―文化と社会的関係」では、有償の育児労働者、高齢者介護のケアギバー、セックスワーカーなど親密性の労働に従事する人々と、彼女らの雇用者 / 顧客のあいだの親密な関係について検証する。第一部で明らかになったように、親密性の労働が遂行される過程は、文化・社会的条件に制約を受けている。しかし彼 / 彼女らはその制約を受けつつも、雇用主 / 顧客との間に親密な関係を築きながら、同時に経済的利益も追求するという困難な交渉を絶えず行う主体でもある。

関係性は価値中立的な真空状態で作られるのではなく、特定の文化・社会体制のもとで構築される。そして親密性の労働は単に金銭で購入されるものではなく、裏切り、虐待、または深い満足感などの感情を結果として引き起こすような複雑なプロセスである。例えば Seemin Qayum と Raka Ray は共著の論文「旅する隷属の文化―ニューヨークとコルカタにおける忠誠と裏切り」において、有償で雇い入れた家事労働者と対等な関係を築こうとした雇用主の女性が、十分な休暇や労働時間の短縮などの権利を家事労働者から求められたことで、彼女に裏切られたという感情をもつに至った経緯を描く。インドのコルカタでは、中産階級家庭に雇用される家事使用人を家族の一員と見なす「愛のレトリック」が存在し、このレトリックのもと雇用主と使用人間の支配 - 従属関係が維持されてきた。自由主義的な思考が行き渡っている現代ニューヨークの資本主義下では、雇用者と労働者の関係はコルカタのような封建的なものではなく、平等

であることが好まれる。雇用者は友情、情緒的な近しさ、忠誠の態度でもって家事労働者に接し、自分と同様に公私の境界を曖昧にすることを家事労働者にも求める。しかしその友情は支配 - 従属関係を消し去ってはくれず、家事労働者が平等を求め始めると、雇用者女性は裏切られたと感じるのである。ニューヨークでは平等な関係が追求されるが、ここでも雇用主と家事労働者は支配 - 従属関係に基づいた、女性によるパターナリズム―著者はこれを maternalism と表現している―にすぎない。このようなケースは労働者の側から見れば、自分の労働条件や立ち位置をめぐる交渉の過程である。彼女らは温情主義的な雇用主の態度に対し、あくまで労働者としてのアイデンティティを維持し、より良い労働条件を求めて雇用主との交渉を重ねるのである。ここから分かるのは、親密性の労働は公私の境界線を曖昧にする効果をもつが、その境界線は完全になくなってしまうわけではないということである。

一方、親密性の労働における雇用者と労働者の感情的な親密さと経済的契約関係は共存しうるものであることを、Maria de la luz Ibara の論文「私の報酬は金銭ではない―メキシコ人介護労働者と高齢者の親密な関係と終末期ケア」は示している。メキシコからアメリカへ移住し、高齢者の看取りも含めた介護者として働く女性のケースでは、介護労働者の女性は顧客の終末期に身の周りの世話でも感情的サポートの面でも必要とされる存在となることに深い満足感を覚え、信仰がよりあつくなったと語る。経済的取引が人間関係に介在することで、感情的紐帯の純粋性は薄められてしまうという認識に対して、この論文は再考を迫るものである。

第三部「親密性の労働の組織化―政治と動員」では、親密性の労働に関わる労働者たちの社会運動が扱われる。歴史的視点からその必要性が述べられ、また労働に親密な関係が包含されているがゆえの社会運動の特徴が明らかにされる。

親密性の労働が低賃金で労働条件も悪いことが正当化されてきた過程を理解するには、それがどのように福祉国家による法的位置づけ―何が福祉で何が個人的責任か、何が依存 / 独立にあたるのか、何が「専門的」なのか―に左右されるのかを考えなければならない。編者の Eileen Boris と Jenifer Klein の論文「在宅ケアをつくる―福祉国家アメリカの法と社会政策」によると、大恐慌の頃から病院や老人ホームのケアのカウンターパートとして在宅でのケアを担っていた在宅ケアワーカーは、はじめは福祉として連邦政府によって支払がなされていたが、看護師との専門性や他の在宅有償家事サービスとの兼ね合い、国家財政やそれに左右される政策によって、1970 年代には私的契約形態に移行した。残業代不払いなどの労働条件の悪さなどを理由として、元在宅ケア労働者らが訴訟を起こしたが敗訴しており、今でも在宅ケアは公的労働と私的な手助けの境界線上にある。この事例からは、何が「労働」であるかとは政治、経済状況によって可変的な定義であり、劣悪な労働条件などに対して、抵抗として社会運動を行うことが可能ということである。

親密性の労働に従事する労働者運動の特徴として、顧客 / 利用者と労働者の間の親密性とが影響を与えるという点がある。Ellen Reese は「でも誰が子どもの世話をするの？―福祉再編の最初期における育児労働者の組織化」において、育児を担う家内労働者の運動に、雇用主である両親が参加した事例を紹介する。有償の育児労働のように、労働の質の高さが社会全体の利益になることから労働者の労働条件の向上を正

当化できる場合、サービスの受け手も巻き込んで運動に動員することができる。

一方で、顧客との対立をともなう運動も親密性の労働には存在する。例えば「マニキュアリングの親密性―ネイルサロン労働における不平等と抵抗」で Miliann Kang は、ネイルサロンの研究からこの問題にアプローチする。アメリカの安価なネイルサロンはエスニックビジネスとしてアジア系移民がオーナーとして経営を行い、従業員も同じエスニシティの移民が占めている場合が多い。施術で用いられる薬剤には有害な化学物質が含まれる場合がある。マスクの着用や危険な化学物質の使用中止を求める労働者の運動は、効率性を求めるオーナーや親密性を演出するためにマニキュアリストがマスクをしないことを望む顧客からは受け入れられづらい。また結論部で Dorothy Sue Cobble が挙げているように、顧客からのセクシャルハラスメントを避けるため、ホステスが店のコスチューム規定に関して異議申し立てをする運動がそれに当たるだろう。以上が本書の概要である。

本書が評価されうる点として、以下の二点を挙げることができるだろう。一点目は、親密性の労働は国家、人種 / エスニシティ、ジェンダー間などの不平等を維持、再生産するという指摘がなされた点である。これは主に第一部で Vora と Almeling によって明らかにされた点であるが、フェミニズム理論が女性の再生産労働、ケア労働、感情労働を問題化してきた歴史に立脚して、視野をグローバルな労働力移動やトランスナショナルな労働形態にまで拡大したことで、親密性の労働を担う人々が被る複合的な抑圧も明らかにすることが可能になったと言えるだろう。

二点目は、親密性の労働を担う人々による労働運動のモデルを示した点である。第三部で Kang が述べるように、親密性の労働という、サービスの受け手との親密な関係を伴う労働がもつ共通点を考えることで、本書では扱われていない種類の親密性の労働に携わる人々の労働運動にも応用が可能であると考えられる。

最後に評者のテーマである、外国人労働者も参入してきている日本社会の高齢者介護について、本書の親密性の労働という視座がどのように有効であるかを示したい。高齢者介護には施設介護と在宅介護の二種類の勤務形態があるが、家事支援のない施設介護では若年男女、在宅の家事支援では主に主婦の経験を生かした中高年女性が多く働くという、ジェンダーと年齢による職務分離が存在するのが現状である。さらに施設介護をより詳しく見ても同様の職務分離がある。刻み食などの個別対応を少人数で任されるうえ、施設利用者に食事の感想もなかなか聞くことのできない調理業務や、汚れ物を扱う洗濯業務には中高年女性が多く配される。一方在宅介護でも、比較的賃金の高い身体介護は男性ヘルパーが多く担う傾向にあるという（山根 2011）。

日本の入国管理政策では、原則として単純労働者の移民を受け入れていないため、人種 / エスニシティに関わる事柄についてはあまり社会問題にならないと言われてきた。しかし 2008 年から開始された経済連携協定（EPA）枠組みでのインドネシア人・フィリピン人介護福祉士候補者の受け入れが比較的大きくマスメディアに取り上げられ、外国人労働者が介護現場で働くことが、一般の人々にも現実感をもって受け止められるようになっているなど状況は変化している。そして EPA 以前にも、日系人枠で来日した日系ブラジル人女性、ペルー人女性や日本人男性と国際結婚したアジア人女性などが高齢者介護の現場で就労

しているという事実がある。このような外国人女性労働者の扱いについては、1971 年に韓国人看護師を研修名目で来日させ実際は病院での介護労働に従事させていたなど（小幡 2005）、エスニシティによってより専門性も賃金も低い職務が割り当てられてしまう傾向があることが示されている。

本書で提示された人種 / エスニシティ、ジェンダー不平等が親密性の労働において維持・再生産されるという視点は、日本社会の高齢者介護現場でエスニシティやジェンダーの属性がどのような職務の分担に結びついているのか知り、批判的に検討するためにも有効であると思われる。

## 注

1）「親密性の労働」の訳語は、落合恵美子・赤枝香奈子編「変容する親密圏 / 公共圏 2　アジア女性と親密性の労働」における訳語を踏襲した。

## 文献

落合恵美子・赤枝香奈子編，2012,『変容する親密圏 / 公共圏 2　アジア女性と親密性の労働』，京都大学学術出版会.

小幡詩子，2005,「介護現場を支える日系移住労働者たち―外国人介護士受け入れのモデル国になるためには」西川潤編『グローバル化時代の外国人・少数者の人権―日本をどうひらくか』，明石書店，138-174.

山根純佳，2011,「ケア労働の分業と階層性の再編」仁平典宏・山下順子編『ケア・協働・アンペイドワーク――揺らぐ「労働」の輪郭』，大月書店，103-126.